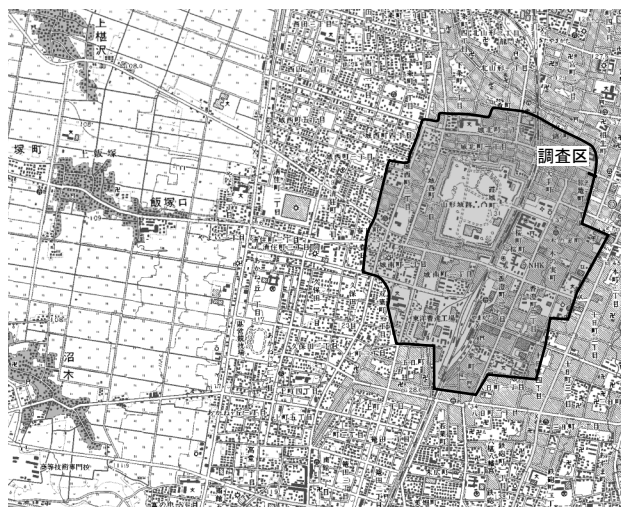


やまがたじょうさんのまるあと

山形城三の丸跡

遺 跡 番 号 中世城館遺跡番号 201-002
調 査 次 数 第6次
所 在 地 山形市旅籠町
北緯・東経 北緯 38 度 15 分 26 秒・東経 140 度 20 分 14 秒
調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調 査 原 因 一般国道 1 1 2 号霞城改良事業
調 査 面 積 470 m²
現 地 調 査 平成 21 年 5 月 11 日～7 月 30 日
調査担当者 佐竹弘嗣（調査主任）・伊藤純子
調 査 協 力 山形市教育委員会・村山教育事務所
遺 跡 種 別 集落跡・城館跡
時 代 奈良時代・平安時代・中世・近世
遺 構 竪穴住居跡・柱穴・土坑・堀跡・溝跡
遺 物 須恵器・土師器・陶器・磁器・瓦・石製品・金属製品
(文化財認定箱数：44 箱)



調査の概要

山形城三の丸跡の発掘調査は、国道 112 号の旅籠町一丁目付近の道路拡幅部分 2,170 m²を対象とし、2 次(平成 20 年度第 4 次調査 1,700 m²、平成 21 年度第 6 次調査 470 m²)に分けて実施した。

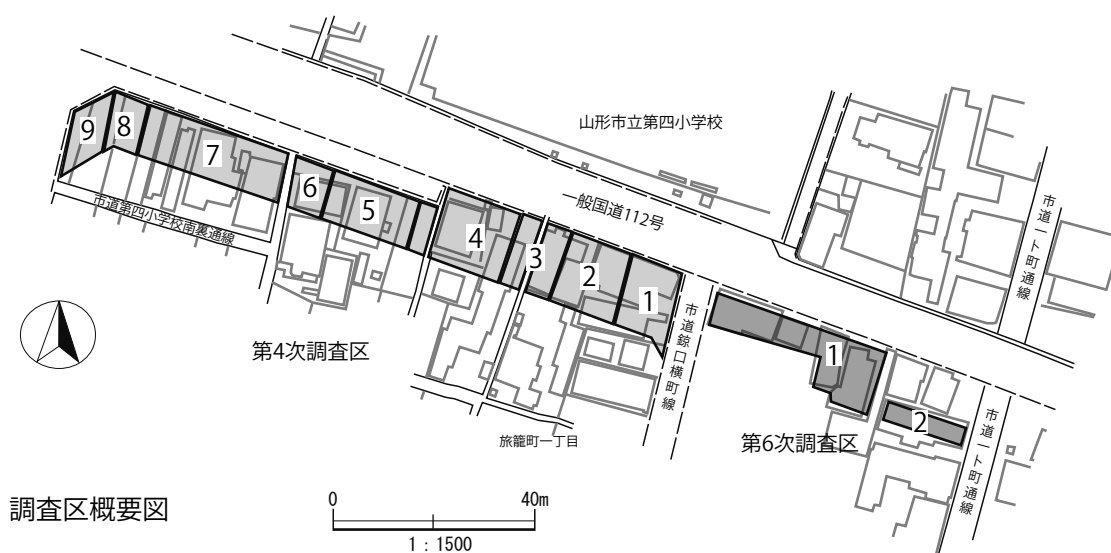
三の丸跡は、東西約 1.6 km、南北約 1.8 km に及ぶ広大な遺跡範囲を有するが、現在では、その全域が市街地化している。発掘調査部分は、三の丸の北東角に近い所に位置し、南東には^{かすがい}鋤口、北西には^{こぼし}小橋口があったとされている。第 6 次調査区は、第 4 次調査区の東側にあた

り、現存する絵図面などから調査区内を三の丸堀が横切っていることが予想されていた。そのため遺跡を覆う表土を重機械で掘削した後は、手作業により堀などの遺構が見えるまで少しずつ慎重に掘り進め、堀跡検出後は、土層断面を確認しながら各層ごとに全体を掘り下げていった。

遺 構

今回調査区を 1 区・2 区の 2 つに分けて発掘調査をした。調査で見つかった遺構は、竪穴住居跡・柱穴・土坑・堀跡等で、調査区全体で約 120 基に及ぶ。また、陶磁器類を主体とする遺物が 44 箱出土している。以下では、各区から見つかった遺構、遺物について概説する。

1 区は西側に柱穴・土坑などの遺構が多数見つかった。中央部付近では奈良・平安時代の竪穴住居跡が 1 棟見つかった。柱穴、土坑は近世の遺構と推定される。柱穴は集中して見つかり、その構成から掘立柱建物跡の存在が推定されるが、確定には至らなかった。竪穴住居跡は、一部攪乱が床面に達しているが、比較的良好な状態で検出され、覆土中から 8 世紀前半のものと推定される須恵器片が出土した。隣接するトレンチからも同時期の須恵器片が出土している。第 4 次調査の 6 区・7 区でも奈良・



平安時代と推定される竪穴住居跡が検出されており、この辺り一帯で古代の集落が営まれたと考えられる。東側には遺構が見られず、石を敷き詰めて整地したような跡が見られた。この部分は、2区で見つかった堀跡との位置関係から土塁があった部分と推定される。整地層は土塁廃絶時のものである可能性が考えられる。

2区では三の丸堀と推定される堀跡と土坑1基が見つかった。堀跡は幅約8.5m、深さは最大約3.8mで、調査区を南北に横切っている。西側が城内、東側が城外にあたり、東側岸に護岸のためと考えられる石組1～6が確認された。堀跡の土層断面の調査から1～18層はシルト層で、初期の石組5からは17世紀前半の遺物が出土しており、17世紀代には護岸がなされ、崩落のたびに石組を補修していたと思われる。19～25層はその下に短期間に堆積したと考えられる砂層、26～32層は砂層堆積以前の東側の崩落層である。33層は最下の泥層で初期の堀底の堆積層である。

土坑は、径約140cm、深さ約70cmで、石組4の下で検出された。堀が機能していた段階で掘られたものと考えられる。

遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦・瓦質土器・かわらけ・石製品・金属製品・古銭・土製品など種類が豊富である。1区・2区とも柱穴・土坑等の遺構からの出土は少なく、1区では整地層からと粗掘時の出土が、2区では堀跡1～18層の間で多く出土した。

種別ごとに見ていくと、土師器と須恵器は1区の竪穴

住居跡周辺から多く出土した。須恵器は8世紀前半のものである。陶器や磁器は東側整地層から多く出土した。18世紀末から19世紀代の江戸時代後期の物が多くを占め、当時国内磁器生産の中心だった肥前（佐賀県）産や愛知県瀬戸産の磁器、佐賀県唐津産の陶器等が出土した。その他、福島県の大堀相馬産の陶器も出土した。器種としては、碗、碗蓋、皿、猪口などの食膳具類が大半を占めるが、灯りをともしひょうそくや陶磁器の焼成に使用された焼台なども多く出土した。

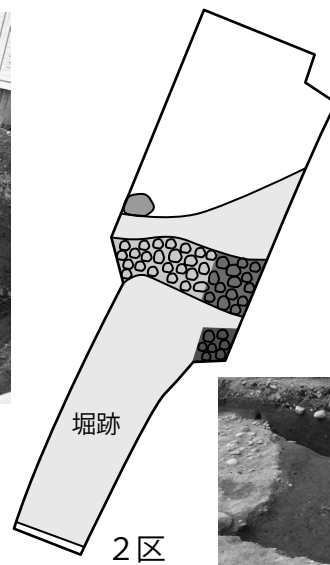
瓦では、黒瓦と赤瓦の両方が出土しているが、黒瓦の数が上回る。種類は、平瓦、丸瓦、巴文軒丸瓦、軒平瓦等が見られる。瓦質土器では火鉢、五徳等、かわらけでは皿、灯明皿が出土し、灯明皿には煤の付着が見られる。石製品には、石材採取時の工具痕が認められる風間産の砥石、石鉢、石臼、硯等があり、金属製品では、釘、火箸、煙管等が、古銭では銅銭と鉄銭が、土製品ではサイコロ、泥めんこ、ミニチュアの七輪等が見つかった。



2区 堀跡調査状況（西から）



2区堀跡 19 層完掘状況 (西から)



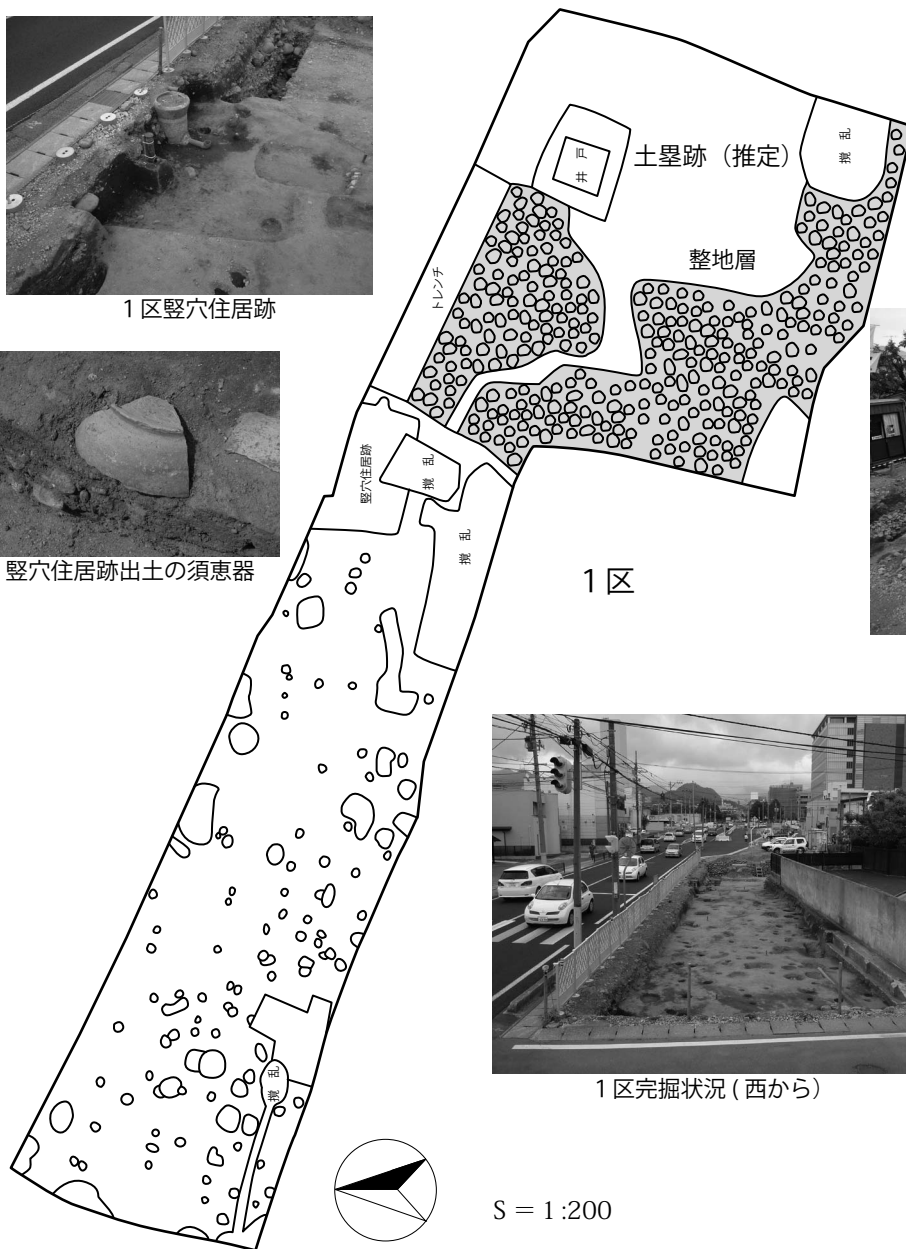
2区堀跡石組 3



1区竪穴住居跡



竪穴住居跡出土の須恵器



1区完掘状況 (東から)



1区完掘状況 (西から)

S = 1 : 200

遺構配置図

まとめ

今回の調査の中で最大の成果は、近世の堀跡の検出である。これまで江戸時代に作られた数種の山形城下絵図面により当該地における三の丸堀跡の大体の位置を知ることができたが、正確な位置関係を把握することができなかった。しかし、今回の発掘調査で堀跡の存在とその規模を確認し、城下絵図に描かれた堀と遺構としての堀跡の位置を特定することができた。さらに調査を進める過程の中で、東側岸に護岸のための石組1～6が確認された。

堀跡の土層断面の調査から4回の底面の変遷が推定された。堀は当初4m近い深さを持っていたが、ある時期河川の洪水等で短期間で砂に埋まり、その後は底が浅いまま堀として機能し、元の深さに復旧することなく廃絶となったことが考えられる。

堀跡からの出土遺物は、1～18層が中心で、18世紀末から19世紀代後半の陶磁器が多く確認された。遺物の中には煙管やひょうそく、泥めんこ、さいころ等の生活用品や子供の遊び道具が出土し、当時の生活の一端を知ることができる。

第4次・第6次発掘調査の結果見つかった遺構と遺物から、奈良・平安時代の集落の存在が明らかとなった。さらに堀跡の石組や埋土の状況、出土遺物等から、三の丸堀が作られた時期や埋められた経緯、その時代背景や生活の様子等多少ではあるが明らかにすることができた。これからさらに他地区での三の丸堀の解明が期待される。



2区堀跡3層出土の磁器皿



2区堀跡7層出土の磁器碗



2区堀跡22層出土の陶器皿



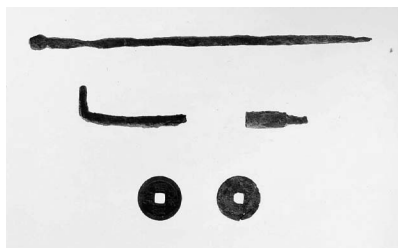
陶器 甕（唐津）



磁器 碗（肥前・瀬戸美濃）



連珠三巴文軒丸瓦



金属製品（上火箸・中 煙管・下 古銭）



陶器 ひょうそく（灯火具）



泥めんこ さいころ（玩具）